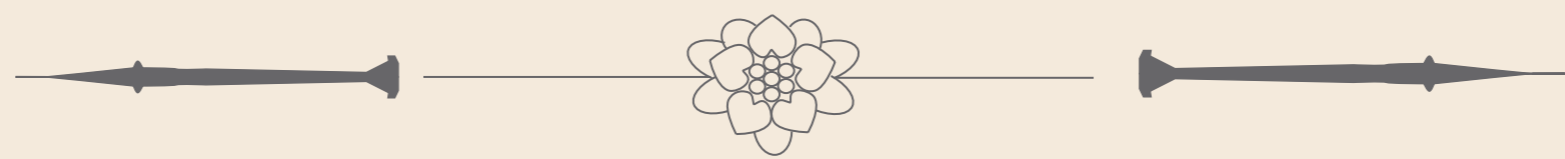


扇湖山莊



扇湖山莊について

扇湖山莊は製薬会社「わかもと製薬」で財を築いた長尾欽彌の別邸として、昭和 9 年に飛騨高山の民家を移築・改築したものです。改築は、大江新太郎らによるもので、建築面積は 1,552 m²、敷地面積は実測で約 47,000 m²（約 14,000 坪）あります。

昭和前期の和風文化を画す代表的な大型遺構であり、市内においても明治期以降の建築物の中では屈指のもので、歴史的・文化的価値を有するものとされています。

扇湖山莊の名前の由来は、建物から一望できる海が扇型をしており湖のように見えることから「扇湖山莊」と名付けられています。



長尾欽彌について

明治 25 年、京都府生まれ。製薬会社「わかもと製薬」で財を築きました。東京の桜新町には好田荘と呼ばれる本邸があり、現在、都立深沢高校内にその一部である茶室・清明亭（大江新太郎設計）のみ残されています。

庭園について

作庭は、小川治兵衛、岩城亘太郎の手になるもので、相模湾を望む鎌倉山の南側斜面地を利用して小川治兵衛の基本的特徴である広闊な植栽の配置、刈り込みの手法など取り入れた晩年の作品です。敷地の半分以上は原生林であり、全体の 1 割程度に手を加え、広大な敷地に変化を持たせ、独立性が強いのが特徴です。

庭園は本館周りに 3 つ、伏見亭に 1 つ、計 4 つに分けられ、山道風の回遊道をめぐりながら景の変化を楽しむといった回遊式庭園の様式をとっています。こうした様式の庭園は、この時期の大規模な個人の邸宅または別荘においてよく用いられているものです。



門から本館の玄関に至るアプローチ部分の前庭で、正面の鎌倉富士と称する大刈込が特徴的です。



本館東側の南斜面に造られた洋風の芝生敷き庭園で、斜面前面に広がる扇状の海を借景としています。



西側の崖と本館との間の流れを主体とする小規模な茶庭で、傾斜地とポンプ水を利用した植治好みの流水（滝）が特徴的です。

小川治兵衛について

庭園の設計は、七代目小川治兵衛、通称「植治」と言う、明治から昭和の造園家で、他には、山縣有朋別邸無鄰菴、岩崎小彌太熱海陽和洞などに携わり、施主層は、明治から昭和に至る時期の隆盛を極めた産業資本家を多く抱えていました。

建物概要

扇湖山荘は長尾欽彌邸の別邸として、建築家大江新太郎、庭師小川治兵衛の手によって造られました。長尾、大江、小川ともに、昭和初年の和風文化史上特筆されるべき存在であり、この三者の出会った作品として現存する唯一の遺構です。

建物は飛騨高山の民家を RC 造の地下室の上に載せ、大江によりプラン・意匠に手が加えられています。南面・東面のテラスには、砕いた陶器が敷きつめられ、屋根は銅板葺としています。建物内部には大江の好んだ猪の目、竹の節欄間、火頭窓など日本の伝統的なモチーフが見られます。

金の間・銀の間

本館の一階南西の角に位置する二間続の和室は西側を金の間、東側を銀の間と呼ばれています。金の間は書院横に植物文様の透かし彫が見られ、天井は折上格天井です。銀の間は床脇の障子窓に氷裂紋や床に火頭窓のデザインが用いられ、天井は折上棹縁天井となっています。金の間・銀の間の境の欄間には若葉唐草の透かし彫が施されています。当初材がほとんど見られず、大江の創作とされています。

1 階土間

春慶塗の太い大黒柱、梁、根太などの民家時代の構造材が見られます。廊下からの入口の欄間やテラスへの出入り口の欄間の猪の目など、大江が手を加えた部分が見られます。

1 階居間

八角形断面の太い梁と根太が見られ、民家時代の部材をそのまま用いてある部屋です。展示ケースと共に竹の節欄間が取り付けられており、大江がよく用いる手法で明治神宮宝物館でも使用されています。造り付けの洋風カウンターやベンチ、民家で見られる囲炉裏（後補）が置かれています。



金の間・銀の間



1 階居間 竹の節欄間



1 階土間

2 階広間

民家時代の養蚕室であった部屋のため当初の登梁や明かり取りが見られ、床は板張りにしています。三面には窓が設けられており、見晴らしがよく、陽が入る明るい空間になっています。上部にある小窓、広間の入口、2 階階段室を猪の目をあしらったデザインにすることで部屋全体に一体感を感じるつくりとなっています。

この広間が当初何に用いられていたのか分かっていませんが、長尾夫妻は頻繁に客を招待しており、その会場に使われていたのではないかとされています。



2 階広間



2 階広間 小屋組



2 階広間 南側